

自立性の発達について

—大学生と成人期初期グループとの比較—

本多史歩・岩堂美智子

A Developmental Study of Independency

A Comparison between college students and
people in the early stage of adulthood

SIHO HONDA and MICHIKO IWADOU

1. はじめに

青年期における望ましい発達課題として、「自立」があげられる。青年期とは、「自分とはなにか」という疑問に直面し、それに伴う不安に耐え、最終的な進路を自らが決定すべき時期である。しかし、近年の科学技術の進歩やそれともなう社会の急激な変動につれて、青年世代による新しい文化・技術の発見、創造という役割が重要になってきたこと、成人世代より「新しい」ものに敏感な青年世代が、情報化、消費社会の主役になったことなどから、青年期の社会的地位や価値が向上していった。そのため、30歳ぐらいまでも、自立を後回しにする「モラトリアム人間」¹⁾ (小比木, 1978) の“青年”が、目立つようになってきている。

従来、「自立」の対になる概念は「依存」であるとされてきた。そのため、一般的には、依存性=幼乳的傾向としてとらえられ、依存は発達につれて自立へと変化するものである、と考えられている。

しかし、現代の日本社会では、浜口が「間人主義」社会²⁾ とよんでいるように、人々は成人してからも互いに依存しあい、対人関係なしでは自己が存在しない。そのため、依存欲求や依存が自立と相入れないものとは、現代では考えられにくいのである。

関(1982)は、依存性を“依存欲求”, “統合された依存性”, “依存の拒否”に分類している。依存欲求とは、「援助、慰め、是認、注意、接触などを含む、肯定的な配慮、反応を他者に求める欲求」³⁾ であり、従来の概念と特に異ならない。依存の拒否は、文字どおり、他者に頼るのも、他者から頼られるのもためらわれるという、他者に関心を示さない傾向を意味している。依存するとは本来、他者への信頼があって初めて可能なこと

であり、この信頼関係は、乳児期における、エリクソンのいう「基本的信頼感」⁴⁾ が、基盤になっていると思われる。基本的信頼感が充分につちかわれていないと、他者への不信や信頼することへの不安が高まり、依存しにくくなる。依存したいが依存できないという感情がある。依存の拒否には、こういった意味が含まれていると考えられる。統合された依存性は、「成熟し、安定し、統合された人格に備わっているべき依存性であり、又、相互依存的な、他者との良好な関係を持ち、且つ、そこから得た安定感を基礎として、自立的になるために、必要不可欠な依存性である」⁵⁾ と定義付けられる。さらにそれは次の4つの下位概念を含むとされている。

- ①人格に内在化している。
- ②その(=依存性の)存在を認めている。
- ③その存在に、不安を感じていない。
- ④自立と相補的に存在する。

さて、小西(1987)⁶⁾ は、青年期における依存性の発達と不安との関係に着目し、大学生を対象にして質問紙調査を行った。この研究は、①先に述べた関の三つの依存性(依存欲求・統合された依存性・依存の拒否)、②安定を欠く心の状態である不安、③自立の自覚度、の五つの要因から青年期の依存性に接近し、その結果、青年期において「(1)自立した人間になるということは、単に他人に依存しなくなるということではなく、依存性が成熟し依存の形が変容した結果、統合された依存性を獲得するということである。つまり、統合された依存性の獲得によって自立性の獲得とみなされる。(2)依存欲求が高くても、依存の拒否が高くても、その人の不安は大きい。(3)統合された依存性を獲得した人は、不安は小さい。(4)依存の拒否が高いと、自分は自立している

と自覚しやすい」としている。その上で小西は、青年たちが、青年期の終わりを告げるため、つまり、自立するためには、統合された依存性を獲得するためのその過程に生じる不安と向き合う必要がある、と説いている。

では、青年期の後、依存性や不安、自立性はどのような発達、変化過程をたどるのであろうか。またどのような状況で変化するのであろうか。本研究はそれを探究するために企画されたものである。

II. 目的

青年期の後、成人期初期をむかえることにより、依存性と不安がどのように変化していくのかを明らかにする。

III. 方法

1. 調査対象

大阪市立大学1～4年生と、同卒業生、合計320名。内訳は(表1)の通りである。

2. 調査方法

質問紙調査法による。回答は無記名で記入を求めた。卒業生に対しては調査用紙を郵送配付し、回答を依頼した。回収も、郵送による返送という形をとった。学生に対しては講義時間内での集団式を中心にした。但し、一部は個別配付し後日回収という方法をとった。

3. 調査期間

1993年8月下旬～11月中旬。

4. 質問紙について

①不安尺度

Taylorの頭在不安測定尺度⁷⁾の50項目(「胃の調子が悪いか」「心配ごとで眠れぬことがあるか」など)を、小西と同様に項目順序を並べ変えて使用した。それぞれの項目につき、「はい」・「いいえ」・「どちらでもない」のいずれかに自己記入する3件法である。

②依存性尺度

関によるもので、依存欲求(「できることならどこへ行くにも誰かと一緒に行きたい」「重要な決心をする時は人の意見が聞きたい」など)、統合された依存性(「一人ではどうにもならない時は、その時々で適当な人に相談する」「自分と相手の立場を尊重しつつ、必要なときには、うまく頼ったり頼られたりするほうだ」など)、依存性の拒否(「安心して人の世話になれないほうだ」「人に頼み事をするのは、どんな時でも、非常な決心がいる」など)の三つの下位尺度からなっている。

項目数は各13項目で、合計39項目である。これに小西が作成した、自立の自覚度「自分は自立した人間だと思う」という1項目を加えた。

それぞれの項目につき「まったくそのとうりである」・「どちらかと言えばそうである」・「どちらとも言えない」・「どちらかと言えばそうでない」・「ぜんぜんそうでない」のいずれかに自己記入する5件法である。

③回答者の属性

1. 性別 2. 年齢 3. 職業 4. 結婚しているのか 5. 離婚経験の有無 6. 子どもの有無 7. 家族構成

5. 調査結果の整理

(1)得点化の方法

①不安尺度(MAS)について

「はい」…1点

「どちらでもない」…0.5点

「いいえ」…0点

とし得点化する。ただし、50項目のうち、9項目(設問1, 7, 19, 25, 28, 33, 35, 46, 49)については逆採点する。そして、得点化したものを合計する。従って、50点満点となる。

②依存性尺度について

依存欲求(DEP)、統合された依存性(ID)、依存の拒否(RD)、のそれぞれの下位尺度ごとに、

「まったくそのとうりである」…5点

「どちらかと言えばそうである」…4点

「どちらとも言えない」…3点

「どちらかと言えばそうでない」…2点

「ぜんぜんそうでない」…1点

とし、得点化したものを合計する。各尺度とも65点満点である。また、小西の加えた自立の自覚度(IND)は、1項目のみで、5点満点である。

(2)整理の方法

(a)DEP、ID、RD、MAS、IND、この5尺度の得点の、平均、標準偏差を、成人と青年、男女別に分類し、t検定を用いて比較検討する。

(b)依存性3尺度(DEP、ID、RD)の得点を被験者のそれぞれにつき、上位群・下位群に分け、その組み合わせにより、8つのプロフィールに分類する。このプロフィールは関が作成したものであり、上位群・下位群に分類する際には、中位約20%に属するものは除外する。そして各依存性プロフィールの、成人の男女、青年の男女別該当者数と、MAS、INDの得点の平均及び標準偏差を出し、比較検討する。

- (c)以上の結果を、小西(1987)の結果と比較し、加齢、時間経過により、依存性や不安がどのように変化するのか検討する。
- (d)成人のなかで、「結婚している」・「未婚である」の分類別に、5尺度(DEP、ID、RD、MAS、IND)の平均、標準偏差を出しt検定で比較検討する。
- また、「子どもがいる」・「子どもがいない」の分類によっても同じように5尺度について比較検討する。

IV. 結果及び考察

(1) アンケート調査について

(a) 5尺度の分類別比較

DEP・ID・RD・MAS・IND(5尺度)の平均、標準偏差、t検定の結果は、表2～表6に示す通りである。

表1. 対象者について

	年齢の幅	男子	女子	合計
成人	26～36	60	72	132
青年	18～23	96	92	188

表2. 成人と青年の平均・標準偏差及び平均の差の検定

	成人(N=132)		青年(N=188)		t-TEST
	M	SD	M	SD	
DEP	42.42	8.57	43.85	7.69	
ID	49.33	7.88	46.82	8.41	**
RD	36.13	8.49	36.99	8.83	
MAS	15.74	6.78	23.04	7.98	***
IND	3.28	1.00	2.68	1.04	***

<0.01 *<0.001 で有意差あり

図1. 不安尺度の得点分布

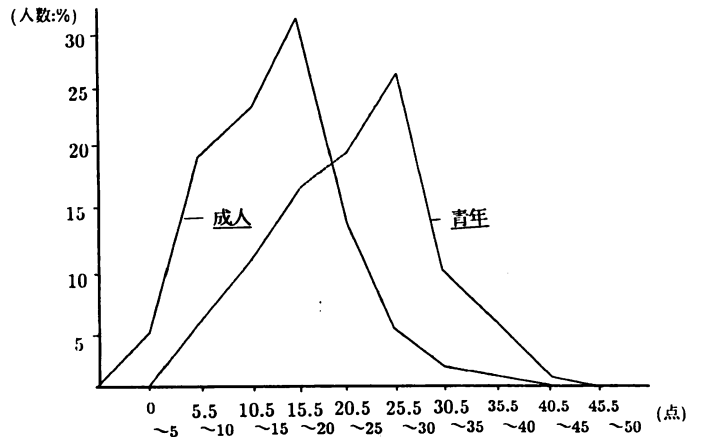


表3. 男子における青年と成人の平均・標準偏差及び平均の差の検定

	成人(N=60)		青年(N=96)		t-TEST
	M	SD	M	SD	
DEP	38.52	7.62	42.09	8.31	**
ID	46.12	7.90	43.58	8.08	
RD	36.75	8.47	39.00	9.20	
MAS	15.13	6.70	23.84	7.73	***
IND	3.58	0.93	2.63	1.14	***

<0.01 *<0.001 で有意差あり

表4. 女子における青年と成人の平均・標準偏差及び平均の差の検定

	成人(N=72)		青年(N=92)		t-TEST
	M	SD	M	SD	
DEP	45.67	7.98	45.68	6.54	
ID	52.01	6.82	50.20	7.39	
RD	35.61	8.53	34.90	7.95	
MAS	16.25	6.85	22.22	8.20	***
IND	3.03	0.99	2.74	0.92	

***<0.001 で有意差あり

表5. 成人における男女の平均・標準偏差及び平均の差の検定

	男子 (N=62)		女子 (N=72)		t-TEST
	M	SD	M	SD	
DEP	38.52	7.62	45.67	7.98	***
ID	46.12	7.90	52.01	6.82	***
RD	36.75	8.47	35.61	8.53	
MAS	15.13	6.70	16.25	6.85	
IND	3.58	0.93	3.03	0.99	**

** < 0.01 *** < 0.001 で有意差あり

表6. 青年における男女の平均・標準偏差及び平均の差の検定

	男子 (N=96)		女子 (N=92)		t-TEST
	M	SD	M	SD	
DEP	42.09	8.31	45.68	6.54	**
ID	43.58	8.08	50.20	7.39	***
RD	39.00	9.20	34.90	7.95	**
MAS	23.84	7.73	22.22	8.20	
IND	2.63	1.14	2.74	0.92	

** < 0.01 *** < 0.001 で有意差あり

成人と青年とでは (表2)、ID、INDについては成人の方が、MASについては青年の方が、有意に高かった (ID: $P < 0.01$ 、MAS、IND: $P < 0.001$)。よって成人の方が統合された依存性、自立の自覚度が高く、青年は成人より不安が強いといえる。なおMASの得点分布については、図1に示しておく。

男子の成人と青年とでは (表3)、DEP、MASについては青年のほうが、INDについては成人のほうが有意に高かった (DEP: $P < 0.01$ 、MAS、IND: $P < 0.001$)。従って男子の青年は男子の成人に比べ、依存欲求が高く、不安が強いことになる。また、男子の中においても成人の方が自立の自覚度が高い。

女子の成人と青年とでは (表4)、MASについては、青年の方が、有意に高い (MAS: $P < 0.001$) というだけで、他の尺度には有意な差はでなかった。つまり女子の成人と青年とでは、青年の方が不安が強い、という

こと以外、差が見られないのだ。

成人の中では (表5)、DEP、IDについては女子の方が、INDについては男子の方が、有意に高いという男女差が出た (DEP、ID: $P < 0.001$ 、IND: $P < 0.01$)。成人では女子の方が、依存欲求も、統合された依存性も高いが、自立の自覚度は女子より男子の方が高いといえる。

青年の中においては (表6)、DEP、IDについては女子の方が、RDについては男子の方が、有意に高いという結果が出た。従って青年では女子の方が、依存欲求、統合された依存性が高く、依存の拒否は、男子の方が高い。

INDについて表7を見ると、得点が4点以上である、

表7. IND (自立の自覚度) の得点状況

	成人(N=132)	青年(N=188)
1	3 (2.3)	29 (15.4)
2	28 (21.2)	47 (25.0)
3	45 (34.1)	73 (38.8)
4	41 (31.1)	33 (17.6)
5	15 (11.4)	6 (3.2)

単位=人 () 内・%

肯定的な回答をしている者は、成人では全体の42.5%であるが、青年では20.8%であり、青年より成人の方が、自分に自信を持ち自立した人間であると考えている者が多いことが明らかである。しかし、男女別にみると (表8)、成人男子では1点という完全否定の回答をした者が0%と皆無であり、4点以上の肯定的な回答は55%と半数以上であるのに対し、成人女子では得点にばらつきがあり、4点以上も、31.9%と成人男子に比べて低い。

表8. IND (自立の自覚度) の得点状況

	男子		女子	
	成人(N=60)	青年(N=96)	成人(N=72)	青年(N=92)
1	0 (0)	18 (18.8)	3 (4.2)	11 (12.0)
2	8 (13.3)	26 (27.1)	20 (27.8)	21 (22.8)
3	19 (31.7)	32 (33.3)	26 (36.1)	41 (44.6)
4	23 (38.3)	14 (14.6)	18 (25.0)	19 (20.7)
5	10 (16.7)	6 (6.3)	5 (4.2)	0 (0)

単位=人 () 内・%

また青年女子では、5点という完全肯定の回答をした者が0%と皆無であることも特徴的である。

以上のことを、各尺度別に見てみると、依存欲求については、女子は、青年期、成人期初期を通して変化が見られず、男子よりも強い。男子においては、青年期は成人期よりも依存欲求が強いが、成人に近づくにつれ弱くなるので、男女間の差は青年期から成人期への移行によって大きくなっていく。

この結果は、女子の方が一般的に依存的であると言われることに呼応している。このように言われるようになったのは、従来から男女の養育のされ方に違いがあるためだと考えられる。「男子にとっては依存行動を示す場合はむしろマイナスの報いを受ける傾向があるのに対して、女子では喜ばれ、身体的攻撃行動をとることにマイナスの報いを受ける傾向がある。このような養育経験の結果、生後数年にして依存性の性差が現れる⁹⁾」ということである。

統合された依存性は、全体では青年より成人の方が高い。従って年齢と共に獲得されうる傾向にある。しかし、青年においても成人においても、女子の方が高い。これは先にも述べたように、女子においては他者への依存が社会的に受け入れられているのに対して、男子は幼い時から“人に頼らない”態度を身につけさせられており、自分自身意識的にもそうしていると考えられるため、依存性の意識化やそれを認める態度において差が現れるためではないだろうか。

つまり女子の方が社会的に自分が依存しているということを受け易いため、男子より依存性が統合され易いと考えられるのではないだろうか。

依存の拒否は全体的には青年期と成人期初期の差はないが、青年期においては女子より男子の方が高い。このことを青年男子が成人男子よりも依存欲求が高かったことと考え合わせると、青年男子は自立しなければいけないが依存していたいという気持ちの葛藤を、依存の拒否という形で対処する傾向があると考えられる。

不安得点は、青年期の後、成人期初期をむかえることにより減少することが明らかになった。男女差は成人期、青年期共無かった。従って青年期の後社会に出て成人期をむかえることによって、不安は少なくなるといえる。

自立の自覚度は、青年より成人の方が高い。また、青年期においては男女差がないが、成人期においては女子より男子の方が高い。成人女子の約6割は無職（主婦）であるのに比べ、成人男子の9割以上が有職者であることから、成人男子の方が経済的自立を得ることにより自立の自覚度が高くなると推測される。

(b)プロフィール分けによる比較

プロフィール分けは、成人男女、青年男女別に行われた。各尺度の上位群 (high)・下位群 (low)の得点範囲は表9の通りである。その結果、成人男子32名、成人

表9. 依存性各尺度、上位群・下位群の得点範囲

		男 子		女 子	
		成 人	青 年	成 人	青 年
DEP	high	42~53 (N=25)	45~61 (N=37)	49~63 (N=28)	48~64 (N=37)
	low	22~37 (N=24)	18~40 (N=37)	13~45 (N=29)	30~44 (N=34)
ID	high	49~64 (N=23)	47~61 (N=35)	55~65 (N=28)	53~64 (N=36)
	low	24~44 (N=25)	28~40 (N=36)	32~50 (N=28)	27~49 (N=38)
RD	high	40~61 (N=24)	42~64 (N=38)	38~53 (N=28)	38~55 (N=36)
	low	17~34 (N=24)	20~36 (N=34)	19~33 (N=28)	14~32 (N=38)

女子35名、青年男子41名、青年女子46名が、分析の対象となった。関の作成したプロフィールの特徴は、表10に示しておく。

表10. 各依存性プロフィールの特徴

I		DEP、ID、RD、いずれも低く、依存性を含めた、対人関係の希薄さ、又は、対人関係に対する関心の小さい事を示す。
II		RDのみ高い型で、成長過程の者に多く見られると考えられる。安心感を求めるより、独立しようとするいわば青年期型である。
III		厳密な意味での、統合された依存性を示す。相互依存的関係を、他者との間にもち、又、一人でも安定し得る。成熟した依存性の型である。
IV		IIIに次いで、成熟した型であると考えられる。RDが高得点で、多少不安である可能性がある。依存不安が高い場合、特にそうである。
V		DEPのみ高く、ID、RD、が低い、と言う点で、程度の差こそあれ、幼少に近い型である。いわゆる“依存的な人だ”と考えられる。
VI		IIIのちょうど逆の型で、適応上、最も問題を含んでいると考えられる。“依存したいのにできない”人であり、機能的な依存性の型である。
VII		女子の依存性の型の典型と言える型で、一応、安定はしているが、DEPが高い点で、成熟した型とは、言い切れない。
VIII		多くの矛盾を含んだ型である。現時点でこの型の解釈はなされ得ないが、何らかの不適応につながると考えられる。

(関による, 1982)

次に、各依存性プロフィール (I~VIII) の成人の男女、青年の男女別該当者数と、MAS、INDの得点の平均、及び標準偏差を、表11~表14に示す。また、該当者数をグラフにしたものが、図2である。

該当者数は、成人の男女、青年の男女共に、Profile II・Profile VIIが多数を占めた。小西による先行研究でも、青年の約7割の者がこの2つに当てはまるとされ、小西はこの2つを、青年期の依存性を表す代表的な形とみなしているが、成人期初期においても、該当者が約5割と多く、青年期と成人期初期とは、代表的な形に変化がない。

表11. 各依存性プロフィールの該当者数及びMAS・INDの平均・標準偏差
(成人男子: N=32)

		I	II	III	IV	V	VI	VII	VIII
該当者数		4 (12.5)	10 (31.25)	3 (9.38)	1 (3.13)	1 (3.13)	3 (9.38)	7 (21.88)	3 (9.38)
MAS	M	14.0	16.5	4.67	19.00	3.00	19.67	14.75	15.50
	SD	3.11	3.77	2.89	—	—	9.61	6.01	3.91
IND	M	3.75	4.00	4.67	5.00	4.00	3.00	3.14	3.33
	SD	1.50	0.82	0.58	—	—	1.00	1.21	0.58

()内…%

表12. 各依存性プロフィールの該当者数及びMAS・INDの平均・標準偏差
(青年男子: N=41)

		I	II	III	IV	V	VI	VII	VIII
該当者数		2 (4.88)	20 (48.78)	1 (2.44)	0 (0)	3 (7.32)	0 (0)	10 (24.39)	5 (12.20)
MAS	M	23.25	25.08	14.50	—	29.67	—	23.00	23.88
	SD	4.60	5.82	—	—	7.32	—	4.13	14.14
IND	M	2.50	2.75	3.00	—	2.33	—	2.30	3.20
	SD	2.12	1.33	—	—	1.15	—	1.06	0.45

()内…%

表13. 各依存性プロフィールの該当者数及びMAS・INDの平均・標準偏差
(成人女子: N=35)

		I	II	III	IV	V	VI	VII	VIII
該当者数		1 (2.86)	10 (28.57)	6 (17.14)	1 (2.86)	3 (8.57)	3 (8.57)	7 (20.00)	4 (11.43)
MAS	M	14.00	12.75	10.83	23.00	20.17	27.67	16.00	16.25
	SD	—	7.76	2.84	—	8.50	12.10	4.03	4.73
IND	M	2.00	3.80	3.33	3.00	2.33	3.00	3.14	3.25
	SD	—	0.79	1.21	—	0.58	1.00	1.35	0.96

()内…%

表14. 各依存性プロフィールの該当者数及びMAS・INDの平均・標準偏差
(青年女子: N=46)

		I	II	III	IV	V	VI	VII	VIII
該当者数		4 (8.70)	10 (21.74)	4 (8.70)	3 (6.52)	2 (4.35)	7 (15.22)	13 (28.26)	3 (6.52)
MAS	M	21.38	21.90	18.00	23.00	22.50	30.06	22.88	30.00
	SD	9.45	7.14	9.77	3.04	11.31	10.22	7.04	5.57
IND	M	3.25	2.70	2.50	3.00	3.00	2.00	3.08	2.67
	SD	0.96	1.06	0.58	1.00	0.00	1.00	0.64	0.58

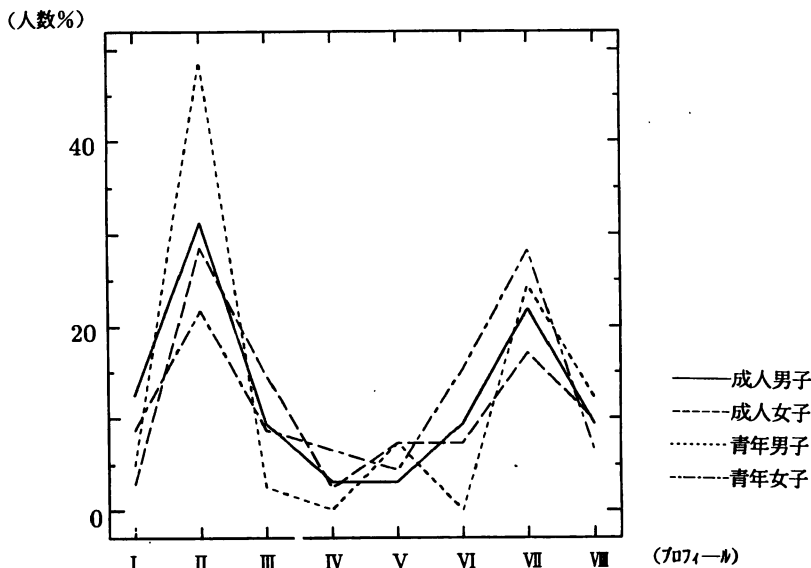
()内…%

〈Profile I〉…3尺度の得点がいずれも低い型であり、依存性を含めた対人関係の稀薄さ、又は対人関係に対する関心の小ささを示していると言われている。また不安得点も自立の自覚度も比較的低く、自分自身についての関心も低いと考えられる。成人男子では4人(12.5%)、成人女子では1人(2.86%)、青年男子では2人(4.88%)、青年女子では4人(8.70%)と少ない方だった。しかし、成人5人のうち、4人が未婚、3人が一人暮らしであり、一人が離婚を経験していることから、対人関係の不全など何らかの不応を起しているのではないかと考えられる。

〈Profile II〉…成人の男女、青年の男子では、最も該当者が多く、青年女子では、2番目に該当者が多かった。成長過程にある者に多く見られ、安定感を求めるより独立のみを望んでいるかのように、依存の拒否だけが高い。しかし、不安得点、及び自立の自覚度は、平均程度であることから、この場合の依存の拒否は、依存不安によるものではなく、“依存の拒否=自立”という概念ができあがっていることによるものと考えられる。つまり、本人は、他人に頼ることなく、同年代のなかでは、並にやっつけていると思っているため、不安得点、及び自立の自覚度は、平均程度なのであろう。

従来の自立の定義に従えば、依存の拒否=自立であるから、このProfile IIは、望ましい型とされるであろう。しかし、自立というものは、依存することを認めた上で、その形態が成熟したものへと変容することによって、得られるものである。従ってこのプロフィールに属する者

図2. 各依存性プロフィールの該当者数



の場合は、そういう発達変容をとげたうえでの、望ましい自立性の獲得といえないのではないか。

男子では、青年から成人への移行によって減少が少し見られるが、女子ではほとんど変わらない。この成人女性の該当者10名(28.57%)のうち、未婚で働いている者が4名、結婚して働いている者が3名(このうち2名には子ども有り)。女性は青年期以後、社会に出て経済的自立を果たしたとしても、男性優位の社会でそれを続けていくために、依存を拒否する方向に向かいがちになることが推測される。

〈Profile III〉…プロフィール(I~VIII)の中で、最も望ましい、厳密な意味での、統合された依存性を示す型である。他者との間に、相互依存的な関係を持ち、かつ一人でも安定しようという特徴を持つ。成人の男女、青年の男女共に不安得点が最も低く、自立の自覚度は平均値前後であった。つまり、他者との相互依存関係の必要性を認めることができ、自分一人の力で生きているのではないということをよく理解していることから、自立の自覚度は、それほど高くない。また統合された依存性の獲得によって、自己の内面に安定感が築かれているため不安は小さい。たとえ、不安が生じて、それを克服するための基礎がきずかれています。

しかし、該当者は、成人男子では3人(9.38%)、成人女子では6人(14.63%)、青年男子では1人(2.44%)、青年女子では4人(8.70%)と、成人で1割程度、青年では1割にも満たなかった。

青年期の発達課題である“自立”が、青年期の後、成人初期をむかえる段階になっても、成しえていないというのが現状のようである。

また、一般的には、経済的自立=自立とみなされがちであるが、このプロフィールの成人女性の該当者6人のうち、有職者3人、無職者3人であることから、経済的自立が必ずしも精神的自立につながるものではないと考えられる。

〈Profile IV〉…Profile IIIに次いで成熟した型であり、依存の拒否が高い点で多少不安定である可能性があると言われている。これも該当者は成人男子1人(3.13%)、成人女子1人(2.44%)、青年男子0人、青年女子3人(6.52%)、と非常に少なかった。該当者数が少ないので、特徴はつかみにくい、不安得点が平均より少し高いことから、依存の拒否の高得点による不安定さが少しあるのではないと思われる。

〈Profile V〉…3尺度の中で依存欲求のみが高い幼児的な型であり、いわゆる“依存的な”人だと考えられる型である。成人男子で1人(3.13%)、成人女子3

人(7.32%)、青年男子3人(7.32%)、青年女子(4.35%)で非常に少なく、成人男子については特徴をつかみきれないが、成人女子と青年男子では不安得点は高く、自立の自覚度は低かったことから、本人自身も自分の未熟さを認め、自分の未熟さに対し不安を抱きやすいと思われる。しかし、青年女子では不安得点も自立の自覚度も平均より少し高い程度なので、女子の場合青年期においては、まだ幼児期からの依存的な態度を続けていても、その依存を受け入れてくれる人が周囲に居さえすれば、そのことに対して特に否定的に考えたり不安を感じたりすることがないのかもしれない。

〈Profile VI〉…成熟した型のIIIのちょうど逆の型で、適応上最も問題を含んでいると考えられる型である。

“依存したいのに、依存できない”人であり、神経症的な依存性の型とも言われている。成人男子3人(9.38%)、成人女子3人(7.32%)、青年男子0人、と少ないのに対し、青年女子は7人(15.22%)と少し多い。不安得点は、成人の男女、青年女子の3分類において最も高く、自立の自覚度も成人男子と青年女子においては最も低く、成人女子でも平均以下である。依存したいのにできず、統合された依存性の獲得もなされていないために、不安の克服も成し得ないのであろう。

〈Profile VII〉…成人男女、青年男子においては、Profile Iに次いで、青年女子においては最も該当者の多かった型である。一応安定はしているが、依存欲求が高い点で、成熟した型とは言い切れない(女子の依存性の典型と言われる型である)。

〈Profile VIII〉…3つの依存性尺度がすべて高得点であるという矛盾型である。すべての点が低かったProfile Iとは、全く逆の型である。関においてもこの型の解釈はなされ得ないが、人格の未成熟など何らかの不適用につながると推測されている。成人男子では3人(9.38%)、成人女子では4人(9.76%)、青年女子では3人(6.52%)、青年男子では5人(12.2%)と、特に青年男子の場合に多く見られた。このプロフィールに該当する者は事例的検討を要するかもしれない。

(c)小西(1987)の先行研究との比較

今回の調査結果と、小西(1987)の先行研究の結果を比較してみた(表15~表20)。

6年前の青年と現在の青年とを比較すると、全体では(表15)、現在の青年の方がMAS(不安得点)が有意に高かった($P<0.05$)。従って昔の青年より現在の青年の方が、不安が多いことになる。これは年々情報化が進み多くの価値の中から自らの価値を選択することが難しくなったことや、近年の不況に伴い真剣に自らの生き

表15. 現在の青年と6年前の青年の平均・標準偏差及び平均の差の検定

	現在 (N=188)		6年前 (N=265)		t-TEST
	M	SD	M	SD	
DEP	43.85	7.69	44.09	8.95	
ID	46.82	8.41	46.10	8.74	
RD	36.99	8.83	37.17	9.14	
MAS	23.04	7.98	21.53	7.43	*
IND	2.68	1.04	2.52	1.13	

* < 0.05 で有意差あり

表18. 成人と6年前の青年の平均・標準偏差及び平均の差の検定

	成人 (N=132)		6年前 (N=265)		t-TEST
	M	SD	M	SD	
DEP	42.42	8.57	44.09	8.95	
ID	49.33	7.88	46.10	8.74	***
RD	36.13	8.49	37.17	9.14	
MAS	15.74	6.78	21.53	7.43	***
IND	3.28	1.00	2.52	1.13	***

*** < 0.001 で有意差あり

表16. 現在の青年男子と6年前の青年男子の平均・標準偏差及び平均の差の検定

	現在 (N=96)		6年前 (N=140)		t-TEST
	M	SD	M	SD	
DEP	42.09	8.31	42.14	8.83	
ID	43.58	8.08	43.35	9.04	
RD	39.00	9.20	38.89	9.27	
MAS	23.84	7.73	21.80	7.99	
IND	2.63	1.14	2.71	1.19	

有意差なし

表19. 男子における成人と6年前の青年の平均・標準偏差及び平均の差の検定

	成人 (N=60)		6年前 (N=140)		t-TEST
	M	SD	M	SD	
DEP	38.52	7.62	42.14	8.83	**
ID	46.12	7.90	43.35	9.04	*
RD	36.75	8.47	38.89	9.27	
MAS	15.13	6.70	21.80	7.99	***
IND	3.58	0.93	2.71	1.19	***

* < 0.05 ** < 0.01 *** < 0.001 で有意差あり

表17. 現在の青年女子と6年前の青年男子の平均・標準偏差及び平均の差の検定

	現在 (N=92)		6年前 (N=125)		t-TEST
	M	SD	M	SD	
DEP	45.68	6.54	46.28	8.56	
ID	50.20	7.39	49.18	7.26	
RD	34.90	7.95	35.24	8.58	
MAS	22.22	8.20	21.22	6.73	
IND	2.74	0.92	2.32	1.02	***

*** < 0.001 で有意差あり

表20. 女子における6年前の青年と成人の平均・標準偏差及び平均の差の検定

	成人 (N=72)		6年前 (N=125)		t-TEST
	M	SD	M	SD	
DEP	45.67	7.98	46.28	8.56	
ID	52.01	6.82	49.18	7.26	**
RD	35.61	8.53	35.24	8.58	
MAS	16.25	6.85	21.22	6.73	***
IND	3.03	0.99	2.32	1.02	***

** < 0.01 *** < 0.001 で有意差あり

方を考えざる得なくなったことが影響しているのではないかと考えられる。

男子どうしでは全く差がなかった(表16)。

女子においては、6年前の青年より、今日の青年の方が、IND(自立の自覚度)が高かった(表17)。これは1986年に男女雇用機会均等法が施行され、女性の社会進出が容易になったことなどから、まだ社会に出て、男性優位の社会に直面することのない青年女子が、6年前に比べ、自分に自信を持っているからだと考えられる。

現在の成人と6年前の青年とでは(表18)ID、INDについては成人の方が、MASについては、青年の方が、有意に高かった(ID、IND、MAS: $P < 0.001$)。これは、現在の青年と成人とを比べた結果(表2)とほぼ同じであった。しかし、ID(統合された依存性)については、現在の青年と成人とでは、1%水準の有意差であるのに対し、6年前の青年と現在の成人とでは、0.1%水準の有意差であることから、統合された依存性の差は、現在の青年と成人の差より、6年前の青年と現在の成人の差の方が大きいといえる。

男子における成人と、6年前の青年とでは(表19)、DEP、MASについては青年の方が、IND、IDについては成人の方が有意に高かった(DEP: $P < 0.01$ 、MAS、IND: $P < 0.001$ 、ID: $P < 0.05$)。これは、現在の青年男子と成人男子とを比べた結果(表3)とほぼ等しいが、ID(統合された依存性)の有意差は、現在の青年男子と成人男子の比較では見られなかった。

女子における成人と、6年前の青年とでは(表20)、ID、INDについては、成人の方が、MASについては、青年の方が、有意に高かった(ID: $P < 0.01$ 、MAS、IND: $P < 0.001$)。現在の青年女子と成人女子とでは(表4)MAS以外の有意差はみとめられなかった。INDの有意差は、6年前より、現在の青年女子の方が自立の自覚度が高まったという表17の結果と同じことを意味する。IDの有意差を、表18、表19の結果と合わせて考えると、6年前の青年達が加齢により、成人期初期をむかえることにより、統合された依存性を獲得していく傾向がみられると言えるのではないだろうか。

(d)成人の中での比較

成人の中で、「結婚している」・「結婚していない」の分類別に見ると(表21)、結婚している方が、DEP、IDについて有意に高かった(DEP: $P < 0.05$ 、ID: $P < 0.01$)。従って、結婚している者の方が、統合された依存性が高く、依存欲求も少し高いといえる。

既婚者の中で、「子どもがいる」・「子どもがいない」

の分類別に見てみると(表22)、子どものいない者の方がMASについて有意に高かった(MAS: $P < 0.05$)。

表21. 成人における未婚・既婚別の平均・標準偏差及び平均の差の検定

	未婚 (N=34)		既婚 (N=98)		t-TEST
	M	SD	M	SD	
DEP	39.74	8.28	43.35	8.51	*
ID	45.18	7.78	50.78	7.42	**
RD	38.35	8.37	35.36	8.43	
MAS	17.35	6.01	15.17	6.97	
IND	3.24	0.89	3.30	1.04	

* < 0.05 ** < 0.01 で有意差あり

表22. 既婚者において子供のいる・いない別の平均・標準偏差及び平均の差の検定

	いる (N=68)		いない (N=30)		t-TEST
	M	SD	M	SD	
DEP	43.70	8.30	42.44	8.65	
ID	50.76	8.00	50.97	6.76	
RD	35.46	8.92	35.28	7.61	
MAS	14.39	6.78	17.63	6.97	*
IND	3.29	1.02	3.25	1.08	

* < 0.05 で有意差あり

つまり、子どものいる者の方が、不安が少ないと言える。この結果は、人生設計ができ安定し、不安が少なくなった者には、子どもがいるというように受けとることができるのではないだろうか。

まとめ

以上の検証の結果、特徴としてみられたことを、まとめてみる。

①全体的にみると、青年期の後、成人期初期をむかえることによって、統合された依存性を獲得し、自立の自覚度が高くなり、不安も少なくなる傾向にあるが、個人個人、プロフィール別にみても、依存欲求が多すぎず、依存の拒否は少なく、統合された依存性のみが高い、

厳密な意味での統合された依存性を示す者は、成人期初期でも、非常に少なかった。

②プロフィール別に見ると、成人期初期においても、依存の拒否のみが高い、青年期型の者が最も多い。

③男子より女子の方が、依存欲求が強い反面、統合された依存性は高い。

④経済的自立のみが、統合された依存性の獲得、つまり、精神的自立につながるものではない。

⑤6年前の青年と比べると、現在の青年の方が、不安が大きい。

⑥現在の青年女子の方が、6年前の青年女子に比べると、自立の自覚度が高く、自分に自信を持っている。

⑦既婚者は、未婚者より、統合された依存性を示す傾向があった。

⑧子どもがいる者の方が、いない者より不安が小さい。

以上の結果を基に、更に成人期初期の自立のあり方を探るために、成人期初期の二人の方々（32歳；男性、34歳；女性）にインタビュー調査を試みた。

両者とも大学を卒業し、結婚し、子どもがいて、自立＝経済的自立とみなしている。二人ともさまざまな課題を乗り越え、「一人前として社会から認められ、自らの生活様式を確立してきている。しかし、それは、せっぱつまった状態に追いやられ、仕方なしと言うもので、内面には、常に、依存拒否や、依存不安がある。また、例えば、自分が精神的に安定した自立を成しえていなくても、もう自分は成人した人間だからというように、自分の未熟さから目をそらしてしまうか、または、自分が未熟であることに気づかず、不安を抱かなくなる傾向にあった。

V. おわりに

これまで、青年期の課題として、昔から掲げられてきた“自立”をめぐる、青年期と成人期初期の比較検討をおこなってきた。既に述べたように、本研究では、自立とは、単に依存しないことではなく、依存性の成熟した形ととらえてきた。

全体的には、成人期初期をむかえることにより、青年期と比べ、「自分とは何か」、といった自己認識の際に生じる不安は減少し、「自分は自立している」という自立の自覚度は、著しく高くなっている。また、統合された依存性も高くなっており、成人期初期において、安定した精神的自立がなされている傾向にある。

しかし、一人一人、細かく分類してみると、厳密な意味での統合された依存性を獲得している者はわずかであった。ほとんどの者が依存欲求が高かったり、依存の拒否が高かったりして、べったり依存してしまおうとする

か、依存をしない、依存を拒否しようとしていることがわかった。

大学を卒業し、社会に出ることにより、「就職」・「結婚」・「出産（親になること）」と、さまざまな課題がおしよせてくる。その度に、「選択」・「決断」を迫られ、依存しないとやっていけない状況や、自立していると自覚せざるを得ない状況に追い込まれることにより、依存しなければいけないこと、独自でやっていかなければいけないことの、自分なりの判断がつけられるようになっていく。このようにして、比較的永続的な生活様式を確立していくことによって、安定感を得ていき、自分は成人したと思うようになっていく。しかし、依存する、しないを判断する際に、依存を排除する方向で判断する者、依存に溺れる方向で判断する者が多いのではないかと、ということがインタビュー調査を通してわかってきた。

また、社会的に自立＝経済的自立とみなされているために、精神的自立＝依存しないことと考えている者がいることも明らかとなった。

経済的自立をし、社会的に一人前として生きていけば、統合された依存性を獲得していなくても別にいいではないかと思う者もいるかもしれない。確かに、統合された依存性を獲得していなくても、社会的に認められ、自らの生活様式を確立していくことは可能である。現に、多くの若者達が、統合された依存性を獲得しないまま、社会の中で、自分の位置を築き始めている。

しかし、I. はじめに、において、幼児期に絶対的依存を受け入れられるという経験を持つことの必要性を述べたが、自分自身が統合された依存性を獲得し、望ましい自立をとげていなければ、子どもの絶対的依存を受け入れることはむずかしい。自分自身が自立しきれていず、依存欲求が強いま親になると、子どもに依存することになりかねないし、依存を拒否することが自立だと考えていると、子どもの欲求を受け入れるべき時でさえ、それをはねつけてしまうことが生じるかもしれない。

また、親である、夫である、妻である前に、一人の人間として、相互依存的で良好な人間関係を築き、その中で、自分というものを成熟させていくことは、より良く生きるために大切なことである。

本研究の結果から、成熟した形での自立をなし得ることは非常に難しい課題であることがわかった。従ってなし得ることの必要性を理解していたとしても、それをすぐに実行に移すことは、一般的にみて無理であろう。

また「若いころは、依存しないことに誇りを抱いていたが、年をとるとよく依存するようになった⁹⁾」と言われるように、年齢とともに、依存の仕方、自立のとらえ

方は変わってくることも予想される。本研究では、青年期と成人期初期の比較検討にとどまっていたが、今後、中年期、老人期と調査対象を広げることで、自立と加齢との関係が、より明確になってくるのではないかと考えられる。また、ある一定の年代を経てから、同じ調査を、青年や成人に試みることにより、各々の時代背景が、調査結果にあらわれるのではないかと考えられる。今後、さらにこれらのテーマを追求してみたい。

VI. 引用文献

- 1) 小比木啓吾 1978 「モラトリアム人間の時代」中央公論社 P8 ~ P99
- 2) 浜口恵俊 1982 「間人主義の社会日本」東洋経済新報社 P3 ~ P18
- 3) 関知恵子 1982 「人格適応面からみた依存性の研究」京都大学教育学部 臨床心理事例研究 9 P232
- 4) Erikson, E.H. 1950 *Childhood and History*. W.W.Norton. 任科弥生訳 1977 「幼児期と社会 I」みすず書房 P317
- 5) 高橋恵子 1969 「子供の社会過程と依存性」岡本夏木(編) 児童心理学講座 8 金子書房 P231
- 6) 小西和子 1987 「現代青年の自立についての一考察—青年期延長と言われる今日の我々青年がすべきこと」生活科学部 児童学科 卒業論文 未公開
- 7) 杉山善郎 1963 「テイラー不安検査」井村恒郎監修 臨床心理検査法 医学書院 P48~P50
- 8) 間宮武 1979 「性差心理学」金子書房
- 9) 河合隼雄 1993 「魂にメスはいらぬ—ユング心理学講義」講談社 P140

Summary

In this study, degrees of "dependency" and "anxiety" were examined using two groups - the first was a group consisting of 188 college students, and the second a group of 132 young men and women in the early stage of adulthood.

The questionnaires used were Taylor's MAS and Seki's DEP scale.

The results are as follows.

1. Generally, in the young adult group, the degree of anxiety was lower, whereas independency consciousness was higher. "The integrated dependency", which is considered to be true independency was also higher than that found in the college student group.
2. By using 8 classification profiles Seki's scale showed that in the young adult group about a half of them belonged to a category in which "dependency" seen in adolescence was the main characteristic, showing the highest rate.